

森詠 著
『ナグネの海峡』
(徳間書店)

「森詠ノカクコイノ」詠さんをよく知っていると聞いた若い知人は叫んだ。そう、森詠は、PARC周辺の物書きの中では数少ない売れっ子作家である。



詠さんとの付合いは、以前PARCが発行していた「ニュー・アジア・ニュース」という英文ニュースレターの編集に関った頃である。当時彼はジャーナリストとして活躍していた。彼の顔の如く丸っこく鷹揚な人柄の反面、取材の執拗さと材料構成能力は見事である。一度詠さんが想いを入れて中東問題を講義して貰ったことがある。中東の複雑な政治関係を黒板に図式化して説明してくれた。善玉は○、悪玉は△というふうには、事実を精密に整理できる人だ。

正義感の強い熱血漢でもある。その詠さんが小説を書き出した。初期の作品『燃える波濤』は三部にわたり、世界を股に掛けた長編大ドラマだ。森詠は

自作を「冒険小説」と呼ぶ。ロマン、哲学や志を持った男の物語と定義する。男のと規定することに抵抗を感じるが、それは彼が男であるからそういうのであり、私は人間のと置換えてよいと思う。

彼は多くの国を旅している。主に第三世界である。中東では砲火を身近に体験している。旅の中で出会った人たちの心、生き様を、世界政治、社会状況と織り混ぜ展開しながら、自らの思想を語っている。日本人の主人公を通して、日本の在り方を問うている。抑圧された人々の強さと優しさが滲みでる。

最新作『ナグネの海峡』は日本と朝鮮の問題を扱った小説である。ナグネ(驕旅)とは「故郷から遠く離れてつらく重い旅」という意味だそうだ。物語の荒筋は、主人公が金塊と黄金の仏

像の強奪事件にまき込まれた弟を追う中に、日本植民支配下の朝鮮で兄弟の父親が殺人を犯したとされるその真相を求めて、二人とも漁船で朝鮮海峡を渡ることになる。その中に在日朝鮮人の問題、敗戦を前にした朝鮮総督府の醜い画策、光州蜂起、韓国民衆の民主化、独立、統一運動等、硬い話題が沢山盛り込まれる。にもかかわらず、一気に読ませてしまうのだ。詠さんならではの筆さばきだ。

日韓問題は詠さんがジャーナリスト時代から深い関心をもって追求した分野である。その関心と問題意識を今回はフィクションで、登場人物の行動、言葉で語らせる。「驕旅の海峡には雨まじりの風が吹き荒れていた」という巻末の言葉は、日韓問題が未だ終わっていないという詠さんの思いであろう。(山鹿順子)

L・ブエンソ監督
『オフィシャル・ストーリー』
(アルゼンチン映画)

真夜中、突然武装した男たちに踏みこまれ、夫や妻、息子や娘が連れ去られる。それきり彼らの消息は絶たれ、警察もとりあってくれない。

こうした憎むべき無法行為が、今日でも世界の少なからぬ国々に横行している。疑う者は、アムネスティ・インターナショナルの月報を見ればよい。そこには毎月あまたの実例が、つづさに報告されている。

づいた軍政下のアルゼンチンで(とくにクーデタ直後の数年間に)何が行なわれたかは、今日では広く知られるようになった。三万人にのぼる行方不明者のほとんどは、軍の秘密部隊の手で拷問され、虐殺された。しかし八〇年頃から被害者の母親たちを中心に激しい抗議運動がまき起り(本誌15号参照)、マルビナス戦争の失敗もあって軍政は倒された。その後の裁判で、当時のビデラ大統領ら数人の最高責任者に、終身刑を含む重い判決が言い渡された。

勢に、まず感じ入らずにはいられないであろう。主人公アリシアは裕福な実業家の妻で、高校の歴史教師。夫婦は五歳の養女を深く愛している。ある日、同窓会で亡命先から帰った友人に会い、軍政時代に彼女が体験した拷問の話きく。アリシアは、それまで直視しようとしなかった「過去の真実」に眼を開くと共に、夫が連



れてきた養女の出生に疑惑を抱く。それが「知らない方が幸せな真実」であっても、彼女は追求せざるにはいられなかった……。これは、当節の日本ではおおよそやらない「告発」のドラマである。音楽やダンス、寸劇を折りまぜた変幻自在の語り口の『タンゴ—ガルドルの亡命』と比べると、ストレートの直球という感否めない。だが、出演者たちの誠実な演技や、画面にみなぎるリアリティは、(凡百の「告発」ドラマは、大抵その辺りで躓くのだが)、少しも誇張を感じさせなかった。ところで、二〇世紀の日本国家がこれだけの歴史的犯罪を積み重ねながら、これをまともに告発してかつ映画史に残るような日本映画が、果たして何本あっただろうか。四月から東京神保町・岩波ホールで公開(大岡竜一)